常葉大学外国語学部紀要〈論文〉
第40号　　2024.3.　　1頁～　18頁

鄭延平王慶誕芳蹤の翻字と現代語訳

The Stela of Coxinga in Hirado, Nagasaki: a Transliteration and Translation to Modern Japanese

若松大祐
WAKAMATSU Daisuke

（令和五年十一月二日受理）

抄　録

本稿は、「鄭延平王慶誕芳蹤」という石碑に着目し、その碑文を翻字して、さらに現代語に訳出するものである。現在のところ、碑文を実見しなければ、一言一句を正確に参照できる機会が少ない。すでに翻字したものがわずかにあるのみで、しかも誤植が散見する。また、正確に現代語に訳出されたものも、管見の限り、見当たらない。そこで、筆者は臨地調査（フィールドワーク）に基づき、翻字と現代語訳を行う。

キーワード：鄭成功、平戸、国姓爺、石碑、碑銘

はじめに
一、鄭延平王慶誕芳蹤の建立
二、翻字と現代語訳
三、石碑に刻まれた原文

はじめに

本稿は、「鄭延平王慶誕芳蹤」という石碑に着目し、その碑文を翻字して、さらに現代語に訳出するものである。現在のところ、碑文を実見しなければ、一言一句を正確に参照できる機会が少ない。すでに翻字したものがわずかにあるのみで、しかも誤植が散見する。また、正確に現代語に訳出されたものも、管見の限り、見当たらない。そこで、筆者は臨地調査（フィールドワーク）に基づき、翻字と現代語訳を行う。

二〇二四年は鄭成功の生誕四〇〇周年に当たり、長崎県平戸市では記念事業が開催される。平戸市川内町の千里ヶ浜に今なお建つ「鄭延平王慶誕芳蹤」に対して、改めて関心を持つ人々も出てくるだろう。

一、鄭延平王慶誕芳蹤の建立とその碑文

「鄭延平王慶誕芳蹤」という石碑は、鄭成功（てい・せいこう、1624-1662、国姓爺、Coxinga）の誕生とその後の足跡を顕彰するものである。今なお、長崎県平戸市川内町の千里ヶ浜に建つ。

鄭成功は、漢人の海商（武装貿易集団、倭寇）である父鄭芝龍と、日本人の母田川マツの間に生まれた。彼は一七世紀の東シナ海で活躍した人物であり、後には近松門左衛門の人形浄瑠璃『国性爺合戦』の主人公のモデルになった。とりわけ一九世紀中ごろから二〇世紀にかけて、日本、中国、台湾では同時代の国策を正当化するために英雄視されてきた。

中でも、一八五二年に肥前国平戸藩が「鄭延平王慶誕芳蹤」を建立し始める。一六六二年に鄭成功が台湾で没し、約五〇年後の一七一五年に日本で近松門左衛門の人形浄瑠璃『国性爺合戦』が上演される。さらにその約一〇〇年後の一九世紀初頭には外国船が日本周辺に出没し、一八五三年にはペリーが浦賀にやって来た。「鄭延平王慶誕芳蹤」は、一八五二年に陰刻が始まる。石板に文字を刻むのは、約四年の時間がかかった。黒船来航（一八五三年）と日米和親条約締結（一八五四年）をはさみ、一八五六年に「鄭延平王慶誕芳蹤」の除幕式が行われたのである[1]。

目下のところ、朝川善庵『鄭将軍成功伝碑』（一八五〇年、約五〇〇〇字）[2]を短縮したものが「鄭延平王慶誕芳蹤」（約一五〇〇字）だと言われている。つまり、そもそもは平戸藩の命を受けて、儒者の朝川善庵（1781-1849）が『鄭将軍成功伝碑』（一八五

[1] 吉福清和「鄭成功の遺品と居宅跡の発掘調査について」、長崎鄭成功と同時代史研究会(編)『鄭成功と同時代史研究：鄭成功生誕３７０年記念：目録・解説・展望』（長崎：鄭成功と同時代史研究会、一九九四年七月）、pp.97-99。同文は、「鄭成功居宅跡の発掘」、平戸市教育委員会（編）『平戸和蘭商館跡の発掘Ⅲ；鄭成功居宅跡の発掘』〔平戸市の文化財34〕（平戸：平戸市教育委員会、一九九二年三月）、pp.109-130を転載したものである。

[2] 「国書データベース＞鄭将軍成功伝碑」（https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100352498/）.

○年、約五○○○字）を上梓する。しかし、約五○○○字を刻める巨石がなく、文字数を削減せざるを得ない。加えて、朝川善庵が没す。そこで平戸藩は葉山鎧軒（1796-1864）に削減を命じる。結果、葉山鎧軒が縮小し、一八五二（嘉永五）年に約一五○○字の碑文ができあがったというのである。こうした説明は、「鄭氏遺蹟碑陰記」（本文一三行、一行あたり一八字、全文二二一字）に基づく[3]。

鄭氏遺蹟碑陰記

乾齋公欲爲鄭氏建碑、初命朝川鼎撰文。鼎字
五鼎、號善庵、爲碩儒、居東都仕於吾藩、往年大
村侯邀之於其封邑。鼎竣事來平戸、遂探討鄭
氏遺跡歸東都、稿成進呈、題曰鄭將軍傳碑、凡
五千五百餘字。以字夥不能上石、欲使改刪可
刻、未成而歿。於是、復命高行稿成、凡千五百餘
字、二稿各有取舍異同。今刻其簡者、鼎所撰録
版、藏於碑西河内浦羽流喜相院。其庭有鄭氏
遺愛竹栢樹、土人謂之力柴、探討者併見亦可
矣。兒誕石在碑西沙礫間、建石標之。舊來相傳、
斯石忌人之上蹈、若上之聞空中有兒啼聲、而
得疾者多不起矣。所傳雖屬怪神事、或係人命、
不可不記也。

石工久家初次郎、豐里萬吉同刻

（大意）

松浦熙が鄭成功のために石碑を立てたいと考え、朝川善庵に碑文を書くように命じた。朝川善庵は優れた学者であり、江戸に住みながら平戸藩に仕えた。朝川は大村藩に招かれ、大村での仕事が終わると、平戸へやってきて鄭成功の事跡を調査して江戸へ戻り、原稿を書き上げて提出した。原稿は『鄭将軍伝碑』というタイトルであり、およそ五五○○字ある。字数が多くて全部を石に刻みきれないから、松浦熙が字数の削減を求めたものの、削減作業が終わる前に朝川が死んでしまった。そこで、松浦熙が葉山鎧軒に碑文の作成を命じたのである。原稿はおよそ一五○○字ある。朝川善庵の原稿と葉山鎧軒の原稿は、それぞれに異同がある。今ここに簡単な方、後の証言になる。

[3]「鄭氏遺蹟碑陰記」は、石原道博「鄭氏遺蹟碑陰記」、『台湾風物 *The Taiwan Folkways*』〔鄭成功開台三百週年紀念特輯（二）〕11巻4期（台北：台湾風物雑誌社、一九六一年四月二九日）、pp.29-31に標点して収録されている。原文（221字）は標点なしの白文である。なお、石原道博は同文において、「庵」の字を使うべきところで全て「菴」を使っている。誤字だろう。「鄭氏遺蹟碑陰記」をのぞくと、朝川善庵の五○○○字を短縮して「鄭延平王慶誕芳蹤」ができあがったという説明は、管見の限り、丸山正彦「平戸における鄭成功」『史学雑誌』六編一○号（史学会、一八九五年）、pp.6-7が最も早そうである。著者の丸山正彦（1859-1914）は平戸出身、帝国大学卒の国学者である。石碑『鄭延平王慶誕芳蹤』の碑文完成や序幕から約四五年〔二〇二三年一一月二日確認〕には、次のように書いてある。

「松浦家第三五代熙（ひろむ）が、鄭成功の偉業をたたえ、京都の儒学者の朝川善庵に「鄭将軍成功伝」（全文五○○○字程度）を作成させました。この文章を刻んだ石碑を作ろうとしましたが、適当な石がありませんでした。そこで、朝川善庵の没後、平戸藩家臣である葉山鎧軒に命じ、字数を減らし嘉永五年（一八五二）に建てられました。」

「鄭成功記念館HP」（https://www.hirado-net.com/teiseikou/access.php）

すなわち葉山鎧軒の書いた碑文を刻む。朝川善庵の書いた碑文の版木は、石碑の西の川内浦の羽流喜相院に保管してある。喜相院の庭には鄭成功が愛した竹栢（なぎ）の木があり、地元では力柴と呼ぶ。興味ある人には、版木と一緒に見てみてほしい。児誕石は石碑の西の砂浜にあり、標識もある。古くからの言い伝えでは、この石は人が踏むのを嫌がる。もし石の上に立つと、空から子供の泣き声が聞こえ、そして病を患い多くは起き上がれなくなるという。この言い伝えはホラーであるけれども、人の命（いのち）にかかわることであるから、書いておかなければならない。

「鄭延平王慶誕芳蹤」の碑文は、すべて漢文（白文）で書いてある。最上部に篆書で「鄭延平王慶誕芳蹤」の文字が、右から左へ並ぶ。本文は楷書で縦書きであり、一行あたり四九字で、全部で三三行ある（→本稿の図2および「三、石碑に刻まれた原文」）。「鄭延平王慶誕芳蹤」の原文（漢文）が、書籍やインターネットで見つかりにくい。恐らく、雑誌『台南文化』に掲載された文章だけが、正確に翻字できている[4]。台湾のデータベースで、『台南文化』の関係ページの電子画像が容易に閲覧できる。しかし、データベースに収録するために改めて翻字された際、ところどころに誤植が生じてしまっているから、電子テキストは使えない[5]。

そこで、筆者は先行研究を踏まえながら、「鄭延平王慶誕芳蹤」を平戸市川内町の千里ヶ浜で実見し[6]、ここに翻字する[7]。なお、標点については、データベース「「台湾文藝叢誌」およびその文人たちの作品集」のものを参照しつつ[8]、時には碑文の内容に即して改めた。

また、「鄭延平王慶誕芳蹤」の現代語訳がない。確かに、『平戸史談』一五号に現代語訳が載る[9]。ただし、この現代語訳には書収録する「鄭延平王慶誕芳蹤」には、実際の石碑に刻まれた碑文と異なる文字がいくつか存在する。「鄭延平王慶誕芳蹤」にもう一つのテキスト（版本）が存在する可能性もある。そこで、本稿では、石碑のものと丸山正彦『台湾開創鄭成功』のものとの異同を記す。

[4]「鄭延平王慶誕芳蹤」、『台南文化』（季刊）四巻四期（台南：台南市文献委員会、一九五五年六月三〇日）、p.74。p.74 には、台南市立歴史館（後の鄭成功文物館、現在の台南市歴史博物館）が陳列第一室に拓本（縦 206cm、横 139cm）を保管しているという注記あり。

[5]「臺南文史研究資料庫」（https://tainanstudy.nmth.gov.tw/article/detail/306/read?highlightQuery=）。また、「地方文獻研究資料庫」（https://tdoc.culture.tw/home）に所収のテキストにも、同様の誤植がある。

拙稿「鄭成功をめぐる近年の国際文化交流：長崎県平戸からの広がり」、『常葉大学外国語学部紀要』三八号（静岡：常葉大学外国語学部、二〇二二年三月）、pp.55-62 に所収の「鄭延平王慶誕芳蹤」の原文は、「臺南文史研究資料庫」の電子テキストを転載していた。したがって、使えない。

[6] 筆者は長崎県平戸市で臨地調査（フィールドワーク）を二〇二三（令和五）年三月二七日（月）から三一日（金）までの五日間に実施した。

[7] 丸山正彦『台湾開創鄭成功』（東京：嵩山房、一八九五年）、pp.148-153 に

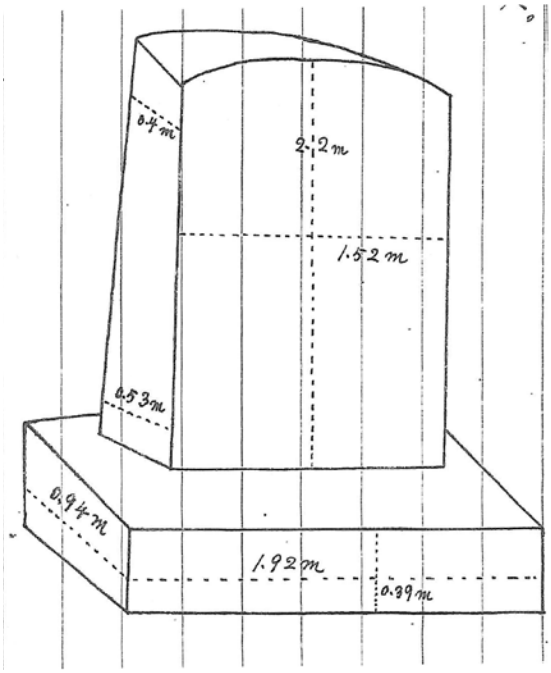
[8]「臺灣文藝叢誌」暨其文人社群作品集」（http://www.literaturetaiwan.com.tw/wenyi/main.html）。および「典蔵臺灣」（https://catalog.digitalarchives.tw/item/00/59/1e/88.html）

[9]「「鄭延平王慶誕芳蹤碑」訳文」、『平戸史談』一五号（平戸：平戸史談会、一九九五年）、pp.60-63。鄭成功の年表が pp.63-68 に載る。

き下しの文体が多方面に残っており、漢文の知識がないと読みづらく、内容を理解しにくい。また誤訳も多い。そこで、筆者が先行研究[10]も参照しながら、現代語訳を行う。

[10]「「鄭延平王慶誕芳蹤碑」訳文」、『平戸史談』一五号に加え、次の二つを参照した。丸山正彦『台湾開創鄭成功』（東京：嵩山房、一八九五年）、pp.148-153は、漢文に標点し、返り点と送り仮名が付く。また、「九州、平戸島海岸児誕石碑文：鄭延平王慶誕芳蹤」、嘉治隆一『沖縄・台湾日記』（時事新書）（東京：時事通信社、一九六八年）、pp.284-290は、平戸市観光課による書き下し文である。

なお、福田殖「平戸千里浜の鄭成功碑文を読む」、『未来を作る教育』二号（長崎県高教組文部、一九六三年二月）があるものの、筆者は未見である。古賀崇雅によると、「平戸千里浜の鄭成功碑文を読む」は、「平戸で生まれた鄭成功の碑文の翻刻、訓読、注釈、後記の体裁からなって」いるという。古賀崇雅「福田殖先生の人と学問」、『中国哲学論集』四三号（福岡：九州大学中国哲学研究会、二〇一七年一二月）、pp.40-79。



（図 1）
高さ：2.2m + 0.39m / 幅：1.52m / 奥行：0.53m
出典:『中野村史跡名勝研究録』(中野尋常高等小学校、1929 年 3 月 10 日)、p.9。

（写真 1）
長崎県平戸市川内町千里ヶ浜に建つ鄭延平王慶誕芳蹤
出典：鄭成功記念館 HP (https://www.hirado-net.com/teiseikou/images/photo/kanko03-b.jpg)

二、翻字と現代語訳

鄭延平王慶誕芳蹤

肥前國平戸嶋千里濱鄭氏遺蹟碑記并銘

鄭延平王の御生誕と御足跡

肥前国平戸島千里ヶ浜における鄭氏の遺業の碑の記事と銘文

明延平郡王鄭將軍成功，初名森，字大木，小字福松。其父芝龍，福建南安人，以慶長壬子來　本邦。　幕府召見，問以外國事，命館長崎。遂徙吾平戸河内浦，娶土人田川氏女。屢訪藩士家，學雙刀技。既而田川氏娠，一日，出遊千里濱，拾文貝，俄將分娩，不暇還家，乃就濱内巨石以誕。是為成功。寔寛永元年七月也。土人今猶名其石曰「兒誕石」。

明の延平郡王である鄭成功将軍は、初めは森という名前で、字が大木で、幼名が福松である。その父である鄭芝龍[11]は福建南安の人であり、慶長の壬子の年[12]に本邦（日本）へ来た。江戸幕府は召見して外国事情を聞き、長崎に住むよう命じた。そして芝龍は我が平戸の河内浦[13]へ移り、地元の田川家の娘を娶る。藩士の家をたびたび訪ね、二刀流の技を学ぶ。ちょうどその頃に田川氏が妊娠した。ある日、千里ヶ浜へ出かけてきれいな貝を拾っていたところ、にわかに産気づく。しかし、家に帰る時間がなく、浜にある巨石にもたれて産んだ。これがまさに鄭成功である。実に寛永元年[14]七月のことだった。地元の人々は、今なおその石を名付けて「児誕石」[15]という。

田川氏復生一男。芝龍留妻及兒，屢往來外國，稱「平戸老一官」。成功年七歳，芝龍請使妻兒渡海。　幕府聽之。母以弟猶幼，不肯俱往。成功數致書迎之，乃詣長崎渡海。弟冒田川氏，稱七左衛門，留住長崎。芝龍入海寇顔思齊黨，顔死而其黨歸芝龍，遂收臺灣。仕明積軍功，封平國公。

田川氏はもう一人の男を産んだ。鄭芝龍は妻子を残してしばしば外国に行き来し、「平戸の老一官」と称した。成功が七歳の時、芝龍は妻子を渡海[16]させるための許可を、幕府に求める。幕府がこれを許す。しかし母である田川氏は弟がまだ幼いため、一緒に行くことにうなずかない。成功は何度か父に手紙を書いて父の求めを受け入れ、そして長崎まで行って、渡海した。弟は田川の名前を借りて田川七左衛門と称し、長崎に住み続けた。芝龍は海賊から、鄭芝龍も自らの拠点に位置付けたのだろう。

[11] 鄭芝龍（てい・しりょう、1604-1661）は、欧文においてNicholas Iquanと呼ばれている。前半は洗礼名であり、後半は「一官」（日本語または福建語）を音写したものか。

[12] 慶長一七年は、中国では万暦四〇年、西暦では一六一二年。

[13] 現在の川内浦。川内浦は、かつては平戸の副港だった。国際交易港だった

[14] 寛永元年は、中国では天啓四年、西暦では一六二四年。

[15] 元々は「こもちいし」や「こうまれいし」と呼んだようである。今は「じたんせき」と呼びならす。

[16] 日本を発ち、海を渡って中国へ向かうこと。

の顔思齊のグループに入る。顔が死ぬ[17]と、そのグループは芝龍のものになり、芝龍はここで台湾を獲った。芝龍は明朝に仕えて軍功を積み、平国公に封じられる[18]。

成功稍長，風儀秀整，倜儻有大志。讀書亦穎敏，不治章句。明主隆武一見偉之，賜姓朱，改今名，拜御營中軍都督。於是人或稱「國姓爺」，不名。

成功は少し大きくなると、容姿も立派で抜きんでて優れており、大志を持った。勉学にしても秀でており、決してガリ勉ではなかった。明王の隆武[19]は一目で偉大であるのを見抜いて彼に朱の姓[20]を賜い、今の名前に、すなわち成功に改めた。また、御営中軍都督の官職を授けた[21]。こうして人々は成功を「国姓爺」と呼ぶこともあるものの、彼は朱姓を名乗っていない。

母亦尋封國夫人。在泉州城為清兵所圍，城陷，軍民皆潰，田川氏歎曰：「事既至此，何面目復見人耶」。登城樓，自剄投水[22]死。清兵曰：「婦女尚爾，倭人之勇可知」。

母もまた同時に国夫人に封じられる。しかし泉州城が清兵に包囲されて陥落し、軍民もともに潰えた際、田川氏は歎いて言う。「事もはやこれまで。どのような顔をして人様にお会いできようか」と。そして城楼へ上り、自ら首を切って城下の濠へ身を投げた。清の兵士たちは、「女がすごいものだ。これが倭人の勇ましさなんだ」と言った。

芝龍保安平，與清將竊通信納[23]降。成功泣諫，不聽遂降。先是，黃徵明齎隆武及芝龍書幣，詣長崎乞援兵。幕府下議執政及三藩，三藩皆欲出援兵[24]。議未決，適報芝龍降清，乃諭諸侯以援兵議罷。

芝龍は安平の地を守りながら、秘かに投降することを清軍と話し合っていた。成功が泣いて諫めるも、芝龍は聴き入れずに遂に降ってしまう。これより先に、黄徵明が隆武および芝龍の書状と贈り物を持ち、長崎へ来て日本に援軍を求めたことがあった。幕府は老中および三藩[25]に議論させたところ、三藩はみな援軍を送りたがった。しかし、議が決しないうちに、ちょうど芝龍の投降を知らされる。こうして幕府は諸侯に援軍の話が終わったことを

17 西暦一六二五（寛永二）年。
18 鄭芝龍は明朝に帰順してますます権勢を誇り、平戸に残していた妻子を明（中国）に呼び寄せたのである。鄭成功が一六三〇（寛永七）年に渡海して明国へ行く。鄭成功が一六四五（正保二）年に福州で隆武帝に謁見し、御営中軍都督になって地位が安定すると、母は福建の泉州へ赴く。
19 原文は「明主隆武」（明のトップの隆武）であり、「明隆武帝」（明の隆武皇帝）ではない。一六四四年に明朝が滅亡して、南明政権が立つ。隆武帝は、南明の二代目の皇帝である。
20 明朝の姓は朱であるから、鄭成功は「国姓」（皇帝と同じ姓）を名乗るのを許されたのである。
21 西暦一六四五（正保二）年。
22 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「投水」の二字を欠く。
23 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「納」を「約」に作る。
24 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「幕府下議執政及三藩，三藩皆欲出援兵」の一文を欠く。
25 御三家（尾張、紀伊、水戸）を指す。

言い聞かせたのだった。

成功諫父不聽，且[26]痛母死非命，慷慨謀起義兵。時雖列爵，未嘗豫兵，詣孔廟，焚儒服，拜揖而去。糾眾得數千人，稱「忠孝伯、招討大將軍」。

さて、成功は父を諫めるも父は聴き入れず、さらに死ぬ運命になかったはずの母の死を悼み、慷慨して義兵を起こそうと考える。当時、成功は爵に列されていたとはいえ、未だかつて軍事に参与していない。そこで孔子廟へ行って儒服[27]を焼き、しっかり拝礼して立ち去った。人々を集め数千人を得て、「忠孝伯[28]、招討[29]大将軍」を名乗る。

聞永曆即位改元，奉朔據南澳。鄭鴻逵據白沙、鄭彩據厦門、鄭聯據梧州，互相犄[30]角。攻略[31]沿海郡縣，陷同安，進侵泉州。又襲奪彩軍，始據厦門。連陷漳[32]浦、詔安、南靖、平和、海澄[33]、長泰，進圍漳州。凡六閱月，城中食盡，人相食，死者枕籍七十餘萬人。援至，解圍而去。越三年，復攻漳州。清將劉國軒降，獻城。

永曆[34]の即位と改元を聞き、成功は正朔を奉じて南澳[35]に拠った。鄭鴻逵は白沙に、鄭彩は厦門（アモイ）に、鄭聯は梧州にそれぞれ拠って、互いに支え合う。成功は沿海の郡県を攻略し、同安を落として泉州に進む。また、鄭彩の軍を襲撃し、初めて厦門に拠る。続けざまに漳浦、詔安、南靖、平和、海澄、長泰を落とし、漳州を包囲した。およそ六ヶ月経ち、城中の食糧は尽き、人々は共食いし、死体の山が七十余万人になる。清（敵）の援軍が来たため、成功は包囲を解いて漳州を去った。三年が過ぎて、再び漳州を攻める。清の将軍である劉国軒が投降し、漳州城を献上した。

於是成功就厦門立府，改名思明州。分所部為七十二鎮，設[36]六官分理所務。擇賢任之，便宜封拜。其所施為，鼓動一世。

こうして成功は厦門に政府を立て、厦門を思明州[37]に改名する。部下を七十二の鎮（地域）に分け、六官を設けてそれぞれ政務を

26 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「且」の字を欠く。
27 文官としての制服。
28 隆武帝から賜った官位。
29 「招討」は「招撫（招降安撫）、征討（出兵討伐）」の意。つまり、帰順を呼びかけ、討伐すること。
30 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「犄」を「特」に誤植している。
31 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「略」を「畧」に作る。
32 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「漳」を「障」に誤植している。
33 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「澄」を「徵」に誤植している。
34 南明の第四代皇帝。
35 南澳は、汕頭の沖合にある島である。現在、中華人民共和国広東省汕頭市に位置する。
36 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「設」の字を欠く。脱字であろう。
37 明朝を思うという意味が、この地名に込められている。

担う。優秀な人物を選び、これを任命して、適宜官爵を与えた。その施政は新たな時代を切り開く。

永曆遣使就拜成功延平郡王[38]，命圖恢復。吾萬治元年，成功奉勅欲取金陵，定南都。乃大舉北上，眾號八十萬，陷浙[39]江諸州縣。

永暦は使いを遣って成功を延平郡王に叙し、明朝の恢復を目指すよう命じる。我が万治元年[40]、成功は勅命を承り、金陵を取って南都に定める[41]のを目指す。こうして大挙して北上し、大軍は八十万だと公言して浙江の諸州県を落とす。

二年七月，攻陷鎮江，登峴山，大饗士卒。令全斌、黃昭等守鎮江。屬邑皆下。直欲進取金陵，甘輝曰：「瓜、鎮為南北咽喉。但坐鎮此，斷瓜州，則山東之師不下。據北固，則兩浙之路不通，南都不勞而定」。成功不聽，竟薄金陵而敗走。甘輝死之。成功乘流出海，還厦門。

万治二年七月、鎮江を攻め落とし、峴山[42]に登って士卒とともに明朝のための祭祀を行う。周全斌や黄昭らに鎮江を守らせた。関係する地域は全て下った。成功はそのまま、金陵を取ろうと目指す。すると甘輝が言う。「瓜州と鎮江[43]は南北に通じる軍事的要衝である。我々がただここ鎮江にじっと留まり、瓜州とのつながりを断てば、山東からの清軍は南下できない。そして北固山[44]に拠れば、浙江からの道がつながらない。こうして、南都は労せずして定まる[45]」と。しかし、成功は聴き入れず、ついに金陵に侵入して敗走した。甘輝はこの時に死んだ。成功は長江を下って海へ出て、厦門へ戻る。

三年五月，滿、漢大兵分道來侵，成功自勒所部扼海門。北人不諳水性，暈注失列。成功乃橫擊之，北兵棄船[46]登奎嶼。又從鏖戰，北將達素僅以身免，還福州自殺。竟成功之世，北兵不敢來窺。

万治三年五月、満漢の大軍が方々から迫ってきた。成功は自ら部下を率いて海門島[47]を守る。北方（清）の人間は水というもの

38 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「延平郡王」の四字を欠く。
39 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「浙」を「淅」に作る。
40 万治（まんじ）元年は一六五八年。
41 清朝が北京に都を置いているので、鄭成功は清朝に対抗して明朝の都を金陵（南京）に置こうとした。ひとまず中国を南北に分け、南方を拠点にして、明朝による中国全土の奪還を目指したのである。
42 正しくは、京峴山。京峴山は鎮江にある。峴山という山は湖北省襄陽にあって、南京から遠すぎる。
43 現在の江蘇省揚州にある地名。東西に流れる長江の北岸が瓜州で、南岸が鎮江である。
44 北固山は、鎮江の東北部、長江の河岸にある。
45 「我々鄭軍は苦労することもなく、金陵（南京）を確保して南都に定めることができる」という意。
46 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「舩」を「船」に作る。
47 九龍江の河口、厦門港内にある島。

に慣れておらず、船酔いして統率を乱す。成功がすぐさま思うままに攻撃すると、北方からの兵隊は船を棄てて奎嶼[48]に上る。また激戦から、北（清）の将軍である達素は命からがら生き残り、福州へ戻って自殺する。成功が生きている限り、北からの軍隊は踏み込まなくなった。

成功[49]以厦門單弱，亟思拓地。先是，因中國騷劇，紅毛酋竊占據臺灣。成功率兵攻之，遂招降其酋，以復臺灣。以赤嵌城為東寧府，居之。永曆蒙塵，聲問不通。成功歎曰：「沿[50]海幅員上下數萬里盡棄之，英雄無用武之地。然息兵休農以俟[51]時，未晚也」。於是制法律、創學宮、計丁庸、養老幼，臺人大集。

成功は厦門では狭いため、急いで拓地を考える。これより先に、中国では動乱[52]があったから、その隙に紅毛[53]の長[54]が秘かに台湾を占拠していた。そこで、成功は兵を率いてこれを攻め、ついにその長を投降させて、台湾を取り戻す。赤嵌城（元はプロビンシャ城）を東寧府と位置づけ、ここに住む。永曆が行方不明で、音信不通になる。成功は歎いて言う。「沿海地域のおよそ数万里を全て棄てる。英雄が力を発揮する機会がない。しかしながら、軍事や農業への取り組みを緩めて時を待つというのも、決して遅くなかろう」と。こうして法律を制定し、学校を創設し、税制を整え、老人を助けて幼児を育てると、台湾の人々は大いに集まった。

吾寛文二年，清改元康熙[55]。使吳三桂攻永曆於緬，緬[56]酋内叛，永曆殂於[57]三桂之手，明亡。訃至，成功憤惋，得疾[58]而卒，年三十[59]九。

我が寛文二年、清朝は改元して康熙になる。清朝は呉三桂に永曆をビルマで攻めさせる。ビルマの長は内紛があって[60]、永曆は呉三桂の手にかかって逝去する。明朝が滅亡したのである。訃報が届くと、成功は憤って歎き、病気になって死んでしまう。年は三十九歳であった。

48 「圭嶼」のことか。圭嶼は、金門島の東北と福建南安との間にある小島。
49 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「成功」の二字を欠く。
50 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「沿」を「沿」に作る。
51 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「俟」を「待」に作る。
52 中国は明清交替に伴い国内が混乱していた。
53 赤い髪の毛の人々、すなわちオランダ人を指す。
54 フレデリック・コイエット（Fredrik Coyet）。オランダ東インド会社の台湾長官。
55 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「熙」を「凞」に作る。
56 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「緬」を「々」に作る。直前に「緬」の字があるからだろう。
57 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「於」の字を欠く。
58 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「疾」を「病」に作る。
59 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「三十」を「卅」に作る。
60 ビルマでは内紛のために国王が交代した。

子經嗣，奉明正朔。北兵屢來侵，輙擊却之，又出兵攻略[61]閩、廣諸州。經或作錦[62]。病而歿[63]于東寧，年三十二。

子の経が跡を継ぎ、明の正朔を奉じる。北の軍がたびたび侵攻してくるも、経はいつもこれを撃退し、また出兵して閩（福建）や広東の諸州を攻略する。経の名前は錦ともいう。病のために東寧で死ぬ。年は三十二歳であった。

子克塽[64]嗣，幼弱，政出多門。清人偵知，擊滅臺灣。克塽降，年十四。至京，授漢軍公。勅令歸葬父祖於南安。克塽死，爵[65]除矣。

子の克塽が跡を継ぐ。しかし幼弱であったから、政令が複数の部署から出るに至る。清朝の人々はこれを探知して、台湾を撃滅する。克塽は投降した。年は十四歳であった。北京へ至り、漢軍公を授かる。勅令にて、父祖を南安へ還して葬る。克塽は死ぬと、爵位が除かれた。

夫甘輝鎮江之策，則明祚、鄭氏之盛衰所由而判也。成功志急恢復，鋭進取敗，地蹙軍孤。是為英雄終古之遺憾。

そもそも甘輝の鎮江での策こそは、明朝の統治や鄭氏の盛衰の基づくところであり、分かれ目だったのである。成功の志は急いで明朝を恢復することであり、急ぎ過ぎて負けてしまう。勢力範囲は縮小し、軍隊も孤立してしまった。これは、英雄の決定的に遺憾とするところである。

初，其圖[66]大舉也，修書乞我援兵。迎朱之瑜，幕府不報。瑜先事至厦門，則部下將吏、寄居縉紳率襲明末弊風，佻達自喜。屏斥禮義，以為古氣、骨董。瑜知大事難成云。雖然，天假以數年，能使成功修東寧之業，其成敗豈可測焉乎。嗚呼。天之厭朱德久矣，故賫恨而卒，痛哉。

当初、成功は大挙を図ったのだ。成功は信書を送り、我ら日本に援軍を求める。朱舜水（之瑜）を迎えるも、幕府は求めに応えない。朱舜水はこれより先に厦門に至った。すると部下、文武官

61 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「略」を「畧」に作る。
62 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「錦」を「錦舎」に作る。閩南語において、「舎」は「少爺」（お坊ちゃん）を「合音連読」（音が脱落したり融合したり）したものだという。「馬祖資訊網 > 離島論壇 > 更多討論區 > 討論與交流 > 生活文化 > 名字「官」的正確解讀」（https://www.matsu.idv.tw/print.php?f=4&t=110063&p=0）［2023/10/31 確認］。
63 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「歿」を「没」に作る。
64 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「塽」を「埶」に誤植している。以下の二ヶ所も同様に誤植である。
65 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「爵」を「舜」に誤植している。
66 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「其圖」を「圖其」に作る。誤植だろう。

員、居候、紳士が明末の悪習を受け継いでおり、浅はかにも得意げになっている。彼らは礼や義を退けて、古臭く役立たずなものだとみなす。こうして朱舜水は、大きな事業は成し遂げられないと知った。そうであったにもかかわらず、天は数年間を使い、成功に東寧での事業を担わせえた。その成否についてはどうして予測できようか。ああ、天が朱徳[67]を厭うのは久しい。それゆえに成功は恨みを抱えながら死んだ。痛ましいことである。

吾　乾齋老公曰：「成功以一時遭遇，自唱大義，以恢復為己任，其正氣耿耿[68]，與天壤俱存。而母亦貞烈，寔不愧為　日東之產矣。是或胚胎於吾封内之素教爾歟。何其迹[69]之奇[70]也。『明清闘記』稱成功學二刀法於平戸藩士。蓋芝龍去崎居我，特睠睠[71]于此伎[72]也。一旦失節，雖為世所貶，其初膽略[73]智慧過絶等倫，時人或擬諸戚繼光。寡人語屋烏私愛，則鄭氏父子俱我池中蛟龍也。遺話古蹟，今而不誌，竟將湮晦，須就千里濱以勒碑誌」。

我が乾齋老公[74]が言う。「成功は一時の出会いがあり、自ら大義を唱え、明朝の恢復を自任した。その正直な心意気は、輝いて誠実で節操を守るものである。天地とともにあった。しかも、母もまた操を堅く守って気丈である。実に日東（日本）の出身者として恥じない。これは、我が領内での素養に基づくのだろう。二人の取り組みにおかしなところがあるはずはない。『明清闘記』によると、成功が二刀流剣法を平戸藩士に学んだという。しかし、思うに、芝龍は長崎を去って我が平戸に住んだ。彼は特にこの技法にしきりに魅かれていたのである。芝龍は一旦、節操を失う。世間の蔑むところであるものの、彼は当初、大胆で思慮深く計略に富んで聡明であり、常人に比べて抜きん出ていた。時として、人々は彼を戚継光になぞらえることもあったという。拙者が屋烏の私愛[75]を語るならば、すなわち鄭氏父子はともに我が池の中の蛟龍なのだ。故事や古蹟は今のうちに記さないと、ついに埋もれてわからなくなろう。そこで、須らく千里ヶ浜に碑誌を刻むべし」と。

即命臣高行以其文。固辭，不允。是以就和、漢紀鄭氏之終始者，摘叙其事實，雜以吾[76]藩所傳，此則　老公之所以追表古蹟而風勵人心也。

御老公はすぐに家臣である葉山高行[77]（鎧軒）に、その文を書くように命じた。葉山が固辞するも、御老公は許さない。そこで

---

67 明朝の徳、すなわち明朝による統治。朱は明朝の国姓。
68 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「耿耿」を「耿々」に作る。
69 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「迹」を「跡」に作る。
70 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「奇」を「奇」に作る。
71 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「睠睠」を「睠々」に作る。
72 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「伎」を「技」に作る。
73 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「略」を「畧」に作る。
74 松浦熙（まつら・ひろむ）、1791-1867、観中、松浦家第三五代当主、肥前平戸藩第一〇代藩主。
75 屋烏私愛。愛及屋烏。相手を好きになったら、その人の家の屋根に止まっている烏をも好きになってしまうさま。
76 丸山正彦『台湾開創鄭成功』に所収の碑文は、「吾」を「我」に作る。
77 葉山高行、1796-1864、鎧軒。平戸藩の儒者、詩人。松浦清（松浦家第三四代当主、肥前平戸藩第九代藩主）に重用される。

葉山は和文や漢文で鄭氏の始末を書いたものに基づき、その事実を略述し、我が藩に伝わるものを加えた。これこそは、御老公が古蹟を追彰し、人心に奨励するゆえんである。

老公手書篆額，又親係銘曰：

「天厭朱德，二帝殂囚。
縉紳佻達，苟生忘羞。
一旅中興，誰述前猷。
惟我鄭兒，涉海報仇。
臺、厦精鋭，資我劒矛。
忠孝義勇，叵覩厥儔。
浩然正氣，孕此　神州」。

御老公は篆額[78]をその手で書いた。また、自ら銘を付けて言う[79]。

「天は朱德を厭い、二人の皇帝が囚われ亡くなった。
紳士は浅はかで、いたずらに生きながらえて羞恥心もない。
滅亡しかけた国家を再興することについて、誰が昔の聖人の道理を踏まえたのか。
ただ我が鄭青年だけが、渡海して仇討ちを行う。
台湾や厦門の精鋭たちが、我が剣矛を手に取る。
忠孝義勇について、彼ほどのものを見つけられない。
天地を覆うほどの正直な心意気というものを、この神州日本で孕んだのである」と。

嘉永五年壬子冬十有二月中澣
平戸親衛隊長領社曹葉山高行謹撰
多賀嘉彰敬書

嘉永五年壬子[80]冬十二月中旬の休暇日
平戸親衛隊長領社曹の葉山高行が謹んで撰す
多賀嘉彰[81]が敬して書く

三、石碑に刻まれた原文

78 石碑の上部に篆書で書いた題字。石碑上部の横書きの「鄭延平王慶誕芳蹤」という篆書は、松浦熙が書いたものである。
79 習慣として、碑文の末尾には詩文を添えた。
80 嘉永五年は、西暦では一八五二年。
81 多賀嘉彰（たが・よしあき、1828-1907）は、書家。

（図 2）
平戸千里浜鄭成功慶誕之碑
出典：稲垣其外『鄭成功』台北：台湾経世新報社、1929 年、p.13（東京大学経済学図書館所蔵）。

鄭延平王慶誕芳蹤

肥前國平戸嶋千里濱鄭氏遺蹟碑記并銘

明延平郡王鄭將軍成功初名森字大木小字福松其父芝龍福建南安人以慶長壬子來　本邦　幕府召見問以外國事命館長崎遂徙吾平戸河内浦娶土人田川氏女屢訪藩士家學雙刀技既而田川氏娠一日出遊千里濱拾文貝俄將分娩不暇還家乃就濱内巨石以誕是為成功寔寛永元年七月也土人今猶名其石曰兒誕石田川氏復生一男芝龍留妻及兒屢往來外國稱平戸老一官成功年七歳芝龍請使妻兒渡海　幕府聽之母以弟猶幼不肯俱往成功數致書迎之乃詣長崎渡海弟冒田川氏稱七左衛門留住長崎芝龍入海寇顔思齊黨顔死而其黨歸芝龍遂收臺灣仕明積軍功封平國公成功稍長風儀秀整倜儻有大志讀書亦穎敏不治章句明主隆武一見偉之賜姓朱改今名拜御營中軍都督於是人或稱國姓爺不名母亦尋封國夫人在泉州城為清兵所圍城陷軍民皆潰田川氏歎曰事既至此何面目復見人耶登城樓自剄投水死清兵曰婦女尚爾倭人之勇可知芝龍保安平與清將竊通信納降成功泣諫不聽遂降先是黄徵明齎隆武及芝龍書幣詣長崎乞援兵幕府下議執政及三藩三藩皆欲出援兵議未決適報芝龍降清乃諭諸侯以援兵議罷成功諫父不聽且痛母死非命慷慨謀起義兵時雖列爵未嘗豫兵詣孔廟焚儒服拜揖而去糾衆得數千人稱忠孝伯招討大將軍聞永曆即位改元奉朔據南澳鄭鴻逵據白沙鄭彩據厦門鄭聯據梧州互相犄角攻略沿海郡縣陷同安進侵泉州又襲奪彩軍始據厦門連陷漳浦詔安南靖平和海澄長泰進圍漳州凡六閱月城中食盡人相食死者枕籍七十餘萬人援至解圍而去越三年復攻漳州清將劉國軒降獻城於是成功就厦門立府改名思明州分所部為七十二鎮設六官分理所務擇賢任之便宜封拜其所施為鼓動一世永曆遣使就拜成功延平郡王命圖恢復吾萬治元年成功奉勅欲取金陵定南都乃大舉北上衆號八十萬陷浙江諸州縣二年七月攻陷鎮江登峴山大饗士卒令全斌黄昭等守鎮江屬邑皆下直欲進取金陵甘輝曰瓜鎮為南北咽喉但坐鎮此斷瓜州則

山東之師不下據北固則兩浙之路不通南都不勞而定成功不聽竟薄金陵而敗走甘輝死之成功乘流出海還厦門三年五月滿漢大兵分道來侵成功自勒所部扼海門北人不諳水性暈注失列成功乃横擊之北兵棄船登奎嶼又從鏖戰北將達素僅以身免還福州自殺竟成功之世北兵不敢來窺成功以厦門單弱亟思拓地先是因中國騷劇紅毛酋竊占據臺灣成功率兵攻之遂招降其酋以復臺灣以赤嵌城為東寧府居之永曆蒙塵聲問不通成功歎曰沿海幅員上下數萬里盡棄之英雄無用武之地然息兵休農以俟時未晩也於是制法律創學宮計丁庸養老幼臺人大集吾寛文二年清改元康熙使吳三桂攻永曆於緬緬酋内叛永曆殂於三桂之手明亡訃至成功憤惋得疾而卒年三十九子經嗣奉明正朔北兵屢來侵輙擊却之又出兵攻略閩廣諸州經或作錦病而歿于東寧年三十二子克塽嗣幼弱政出多門清人偵知擊滅臺灣克塽降年十四至京授漢軍公勅令歸葬父祖於南安克塽死爵除矣夫甘輝鎮江之策則明祚鄭氏之盛衰所由而判也成功志急恢復鋭進取敗地蹙軍孤是為英雄終古之遺憾初其圖大舉也修書乞我援兵迎朱之瑜　幕府不報瑜先事至厦門則部下將吏寄居縉紳率襲明末弊風佻達自喜屏斥禮義以為古氣骨董瑜知大事難成云雖然天假以數年能使成功修東寧之業其成敗豈可測焉乎嗚呼天之厭朱德久矣故齎恨而卒痛哉吾　乾齋老公曰成功以一時遭遇自唱大義以恢復為己任其正氣耿耿與天壤俱存而母亦貞烈寔不愧為　日東之產矣是或胚胎於吾封内之素教爾歟何其迹之奇也明清闘記稱成功學二刀法於平戸藩士蓋芝龍去崎居我特睠睠于此伎也一旦失節雖為世所貶其初膽略智慧過絶等倫時人或擬諸戚繼光寡人語屋烏私愛則鄭氏父子俱我池中蛟龍也遺話古蹟今而不誌竟將湮晦須就千里濱以勒碑誌即命臣高行以其文固辭不允是以就和漢紀鄭氏之終始者摘叙其事實雜以吾藩所傳此則　老公之所以追表古蹟而風勵人心也　老公手書篆額又親係銘曰天厭朱德二帝殂囚縉紳佻達苟生忘羞一旅中興誰述前猷惟我鄭兒涉海報仇臺厦精鋭資我劒矛忠孝義勇叵覩厥儔浩然正氣孕此　神州

嘉永五年壬子冬十有二月中澣平戸親衛隊長領社曹葉山高行謹撰多賀嘉彰敬書

＜主要参考文献＞（出版年順）
丸山正彦『台湾開創鄭成功』東京：嵩山房、一八九五年。
稲垣其外『鄭成功』台北：台湾経世新報社、一九二九年。
石原道博『国姓爺』〔日本歴史学会編集「人物叢書」〕東京：吉川弘文館、第一版一九五九年、新装版一九八六年。
『鄭成功』平戸：平戸市観光商工課、中野観光協会、初版一九九二年七月、修訂版一九九三年一〇月。
長崎鄭成功と同時代史研究会（編）『鄭成功と同時代史研究：鄭成功生誕３７０年記念：目録・解説・展望』長崎：鄭成功と同時代史研究会、一九九四年七月。
何廷瑞「日本平戸島上有関鄭成功父子之資料」、鄭親池（編）『平戸と鄭成功』台北：鄭親池、一九九六年二月。（印刷は平戸で行った？）
岡部狷介（編）『史都平戸：年表と史談』〔九版〕平戸：松浦史料博物館、二〇一〇年七月。
遠流台湾館（編著）、横澤泰夫（編訳）『台湾史小事典』〔第三版〕福岡：中国書店、二〇一六年一一月。
若松大祐「鄭成功をめぐる近年の国際文化交流：長崎県平戸からの広がり」、『常葉大学外国語学部紀要』三八号（静岡：常葉大学外国語学部、二〇二二年三月）、pp.55-62。
若松大祐「鄭成功の描かれ方：１８５２年平戸、１９３０年台北、そして２１世紀」、『社会システム研究』四七号（草津：立命館大学社会システム研究所、二〇二三年九月）、pp177-193。

『常葉大学外国語学部紀要』40号（二〇二四年三月）は刊行後、「常葉大学・常葉大学短期大学部リポジトリ」（https://tokoha-u.repo.nii.ac.jp/）に電子版（ＰＤＦファイル）が掲載される予定である。したがって、本稿も電子版をダウンロードできるようになる。